

国道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

いづもさき
出雲崎百塚

1984

新潟県教育委員会

国 道 116 号 線

埋蔵文化財発掘調査報告書

いずもさき
出雲崎百塚

1984

新潟県教育委員会

序

新潟県は上越新幹線および関越自動車道・北陸自動車道の部分的開通によって、交通体系が整備され関東・関西圏との交流が一段と活発になってきた。建設省北陸地方建設局が進めている国道116号線の改築工事（西山バイパス・出雲崎バイパス）もこれら幹線道路網の整備の一翼をになうもので、国道8号線の代替路線として、近年の自動車交通量の増大は目ざましいものがある。しかし、現路線は丘陵間を縫うように狭い谷間を走り、集落内を通過するため、そのカーブはきつく道路幅も狭いので交通混雑と事故の多発を招いている。

県教育委員会はこれらの事業にかかる遺跡の取扱いについて、建設省北陸地方建設局とたび重なる協議を行った結果、本塚については回避することはさけがたいという結論に達し、記録保存をすることになった。

本塚群は統計40基の塚で、このうち発掘を行ったものは法線内にかかる1基だけである。県内でも本塚のように群集している塚が、柏崎市・小千谷市・越路町などに存在し、その一部が調査されているにすぎない。本塚の調査成果が、県内の塚の考古学的研究や地域の歴史を考えるうえで一助となれば幸いである。

なお、本調査に対して多大な御協力・御援助を賜わった出雲崎町教育委員会並びに出雲崎町役場、調査の計画から実施に至るまで格別の御配慮を賜わった建設省北陸地方建設局長岡国道工事事務所に対し、深甚なる謝意を表する次第である。

昭和59年5月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

例　　言

1. 本報告書は新潟県三島郡出雲崎町大字小木字寺尾地内に所在する、出雲崎百塚の発掘調査記録である。発掘調査は国道116号線バイパスの建設に伴い、新潟県が昭和58年度に建設省北陸地方建設局から受託して実施したものである。
2. 「新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード」では単に「百塚」となっているが、本書では他の百塚との混同を避けるため「出雲崎百塚」という名称を使用した。
3. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和58年9月1日から昭和58年10月7日まで実施したものである。
4. 遺跡での実測・写真撮影等には各調査員があたり、遺物の整理作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。なお、全体平面図の作成は㈱オリジナルサーバーに依頼した。
5. 遺物の実測・写真撮影・図版の作成には北村 亮があたった。
6. 発掘調査における出土遺物は、一括して県教育委員会が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は調査担当者を中心にして分担執筆したもので、I・II-1・2を戸根が、II-3・III・IV・Vを北村が執筆した。
8. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏・機関から種々の御指導・御助言・御協力を賜わった。(敬称略)

安達秀寛 金子拓男 田中真吾 鈴木工機株式会社

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境と周辺の遺跡	4
3. 立地と現状	5
III 調 査	6
1. グリッドの設定	6
2. 発掘調査の経過（調査体制を含む）	6
IV 遺構と遺物	8
1. 百塚 1 号塚	8
2. 曲輪状遺構 I	9
3. 曲輪状遺構 II	10
4. 出土遺物	11
V 総 括	13
1. 百塚と曲輪状遺構について	13
2. 周辺の塚について	14

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の地形	2
第 2 図 位置と周辺の遺跡	3
第 3 図 百塚配置模式図	5
第 4 図 グリッド・試掘トレンチ設定図	6
第 5 図 基本土層模式図	7
第 6 図 遺構平面図	折り込み
第 7 図 1 号塚平面・土層断面図	9
第 8 図 曲輪状遺構 II 土層断面図 (E - F)	10

第 9 図	曲輪状遺構Ⅱ土層断面図 (G-H)	11
第 10 図	出土遺物	12
第 11 図	周辺の塚分布図	15

図 版 目 次

- 図版第1図 造跡遠景(南西から), 完掘後遠景(南西から)
- 図版第2図 1号塚(東から), 1号塚周溝(東から)
- 図版第3図 1号塚土層断面(A-B), 1号塚土層断面(C-D)
- 図版第4図 曲輪状遺構Ⅱ(西から), 曲輪状遺構Ⅱ基底部(北から)
- 図版第5図 曲輪状遺構Ⅱ土層断面(西側斜面), 曲輪状遺構Ⅱ(椭形部分)
- 図版第6図 曲輪状遺構Ⅱ土層断面(E-F), 曲輪状遺構Ⅱ完掘スナップ
- 図版第7図 曲輪状遺構Ⅱ完掘状況(南西から), 曲輪状遺構Ⅱ土層断面(G-H)
- 図版第8図 出土遺物(約1/2)

I 調査に至る経緯

国道116号線は柏崎市から西山丘陵の向斜谷を北上し、西蒲原郡の弥彦・角田山系を北西に見て新潟市に至る総延長77.7kmの国道である。当路線は新潟市～長岡市～柏崎市と通過して日本海沿岸を南下する国道8号線の代替路線として、近年の自動車交通量の増大は目ざましいものがあり、新潟県はもとより日本海沿岸の重要路線として文化・産業・経済の広域的発展に大きな役割を果たし、沿線2市7町3村の地域住民の生活活動を支えている。しかし、現路線は西山丘陵と曾地丘陵の間を縫うように狭い谷間の集落を通過するため、そのカーブはきつく、道路幅も狭いので、交通混雑と事故の多発を招いている。さらに、冬期は風雪の厳しい地域のため除雪作業及び交通確保に大きな障害となっている。

建設省北陸地方建設局はこの地域の地質・土地利用などを総合的に勘案し、幹線としての役割及び地域の要望をになったバイパスとして、その整備を進めている。北陸地方建設局は昭和50年12月15日、改修工事計画に係る埋蔵文化財包蔵地の所在について新潟県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）へ照会し、これを受けた県教育委員会は分布調査を実施し、昭和51年7月6日に建設省北陸地方建設局長へ回答した。その後、両者で協議を重ねた結果、計画変更が不可能なものについては発掘調査を実施して記録に留めることになった。

本遺跡も発掘調査対象の一つであり、昭和55年7月18日に長岡国道工事事務所の担当技官から口頭で発掘調査依頼があった。その後、昭和56年7月21日付け、建北長調第717号で長岡国道工事事務所長から、県教育委員会に百塚の現地調査依頼と取扱いについての協議があり、同年11月5日、県教育庁文化行政課の学芸員3名が現地調査を行った。調査の結果、塚1基を含む平坦部約1,270m²を調査対象地とし、同年11月11日付け教文第548号で、長岡国道工事事務所長あて回答した。これにもとづいて、建設省北陸地方建設局から同年12月12日付け建北道政第506号で文化財保護法第57条の3の通知が提出された。昭和57年11月9日、長岡国道工事事務所の担当建設技官が来庁し、早期発掘調査の要請があった。年が明けると協議も本格化し、昭和58年3月24日に長岡国道工事事務所と県教育委員会とで協議を行った。発掘調査は7月末日終了を前提とし、資材搬入道路の確保・用地内の立木伐採・委託契約などの事務的処理を進めることで一致した。また、調査報告書の刊行については、建設省関係のものをすでにかかえているため、次年度に見送ることになった。しかし、資材搬入道路の確保に係る土壌改良工事は思うように進まず、7月発掘調査の計画は大幅にずれ込んだ。最終的には、同年9月1日～10月7日まで実施することとなり、県教育委員会は同年8月15日付け教文第601号で、文化財保護法第98条の2の通知を文化庁長官に行った。

II 遺跡の環境

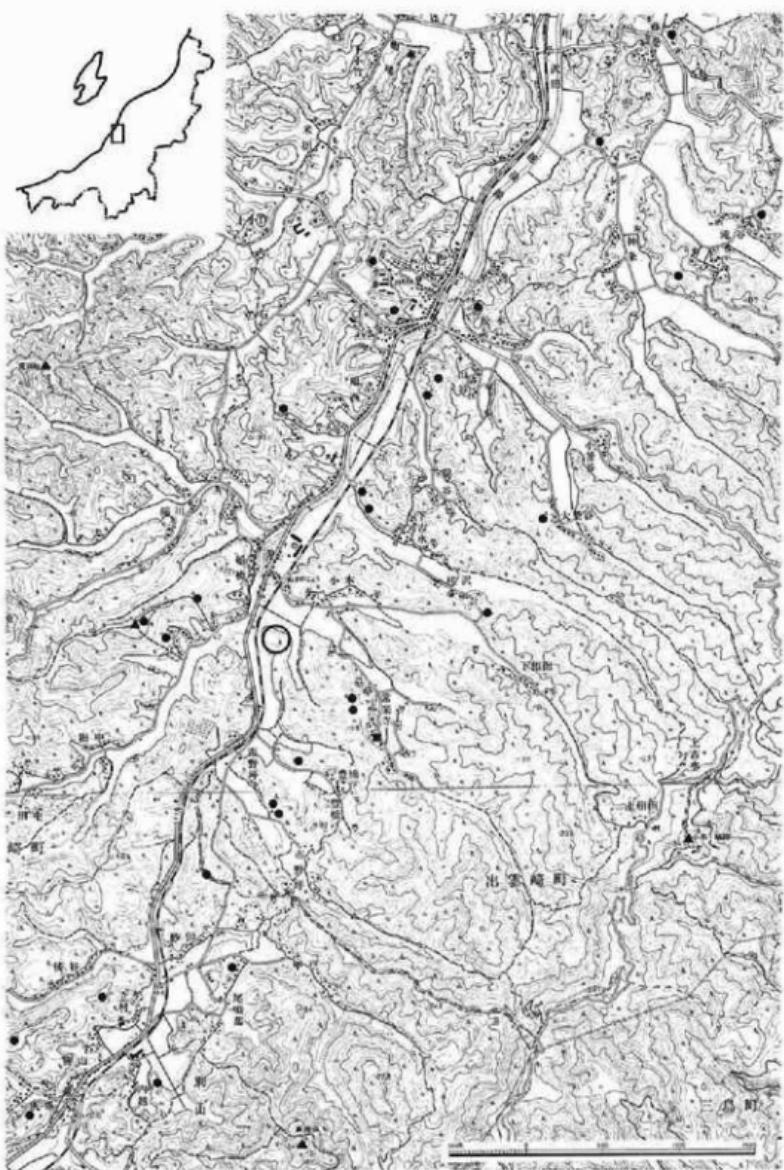
1. 地理的環境

出雲崎町は新潟県のはば中央部にあって、西側は日本海に接している。面積は44.77km²で、海岸部の旧出雲崎地区と島崎川流域の旧西越地区からなっている。旧出雲崎地区は、江戸時代まで越後と佐渡を結ぶ港町として栄え、明治時代には石油発祥の地として脚光をあびた地域でもある。旧西越地区は古くから西古志郷の中心地として栄えてきた地域である。島崎川の両岸は丘陵性の山地で、丘陵の連なりは南南西から北北東の方向を示し、基本的には二本の背斜構造で構成されている。この地域の南はかけて尼瀬・西山の油田に代表される石油の産地であり、地形も石油構造といわれる背斜・向斜の軸のうねりにそのまま支配され、河川の流れも丘陵と同じく南南西から北北東の方向を示している。

島崎川の左岸には標高80~90mの低い丘陵があり、西山丘陵と呼称され、北側は国上山・弥彦山・角田山へと続いている。西山丘陵の構造線に直交する東側は数多くの谷が形成され、解析が著しく進んでいる。島崎川の右岸の丘陵は、東頸城丘陵に源を発する曾地丘陵で、標高200~300mを割り、曾地峠~妙法寺峠~地蔵峠~二田城~薬師峠~小木ノ城~中永峠~剣ヶ峰峠~笠抜山~塩之入峠と続き、徐々に高度をおろしてその北端は寺泊町敦ヶ曾根で新潟平野に没している。本丘陵の東および西側も西山丘陵の西側と同じように、谷幅が狭く、奥行のある沢が数多く存在している。向斜軸を北流する島崎川は出雲崎町田中・市野坪に源を発し、両岸に沖積面を形成しながら寺泊町小豆曾根に至る延長18.3kmの河川で、かっては西川に合流し、下流部の寺泊町の夏戸から鶴口・竹森は常に湛水に悩まされたといわれている。特に、今回調査の対象地となった島崎川上流部は、曾地丘陵と西山丘陵が接近して分水嶺となり、谷幅も狭



第1図 周辺の地形



● 塚および塚群

■ 中世集落跡

▲ 城館跡

○ 出雲崎百塚

第2図 位置と周辺の遺跡

(国土地理院発行「出雲崎」「柏崎」1:25,000原図)

く約250m～300mで北へ約10km続き、和島村島崎で幅2km弱となってそのまま新潟平野へと続いている。現集落も耕地との関係から沖積地と丘陵の境界部や、西山・曾地両丘陵に直交するように刻まれた谷筋の丘陵裾部にあり、谷筋を一つのブロックとして農業生産が営まれている。

2. 歴史的環境と周辺の遺跡

出雲崎町は律令時代にあっては、越後国古志郡の一部であり、「倭名抄」に大家・栗家・文原・夜麻の四郷が、「延喜式」には北陸道の駅として大家・伊神・渡戸の三駅と式内社として三宅神社・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社の5社6座が記されている。大家駅は「倭名抄」に記された大家郷と同所と思われ、現在の出雲崎に、伊神駅は寺泊に、渡戸駅は寺泊町渡部に比定されているが、判然としないものが多い。式内社については今まで継承するものか否かは別として三宅神社以外は都野神社が与板町与板に、小丹生神社が和島村島崎に、宇奈具志神社が出雲崎町乙茂に所在している。桐原石部神社は和島村上桐と寺泊町下桐にあり、その所在については明確になっていない。古代の北陸道については海岸部を通ったのか、内陸部を通ったものかについては種々の説があるが、式内社5社6座のうち4座までが島崎川流域に存在していることや、考古学的には島崎川流域に須恵器の出土する遺跡が古志郡中他の地域に比して圧倒的に多いこと（金子 1976）や中世の塚についても西山丘陵と曾地丘陵にはさまれた別山川・島崎川流域に極めて多いこと（戸根 1979）などから、古代・中世を通じて本流域が交通ルートとして栄えたことがうかがわれる。

第2図は主に島崎川流域の塚の分布図で、群をなして存在するものが多い。このうち発掘調査がなされ、塚の性格が明らかにされたものは皆無である。島崎川・別山川流域の塚の分布についてはすでに述べられ（戸根 1979），その立地から低丘陵の頂部にあるもの、丘陵の傾斜変換付近にあるもの、山地から派生した尾根や丘陵端を必要な所から切断して構築したものがあり、その並び方は等高線に対して直角に並ぶものと等高線に対して平行に並ぶものなどがある。個々の塚および塚群を現集落との関係で考えると、現集落より高い丘陵上にあって、集落の出入口や集落の郊外および旧街道に沿ってあり、集落と一体となって存在していると言える。

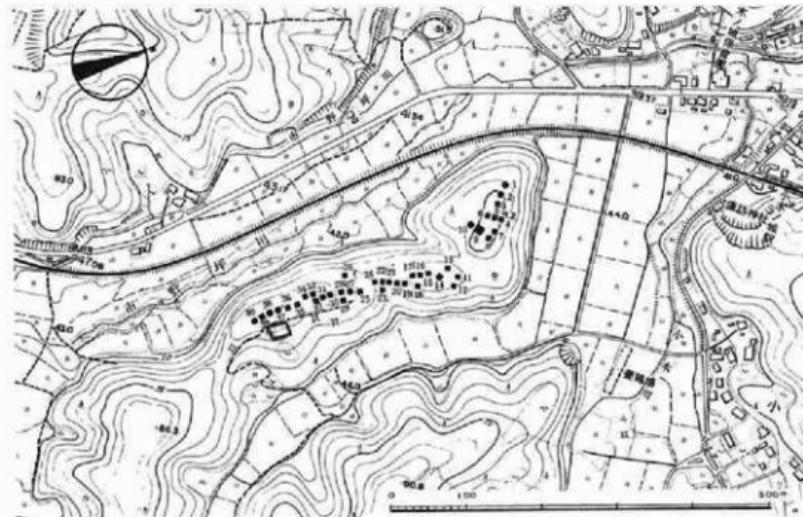
塚群の立地する丘陵の主要尾根上には山城があり、山城も地形的分断によって各々の位置を占め、塚と山城は有機的関連性をもっているといえよう。百塚の主要尾根上には南北朝時代に南朝方に立って活躍した萩氏の居城といわれている小木ノ城跡がある。本城跡からは中越地方の主要城館跡を眺望でき、おそらく狼煙連絡の城として重要な役割を果していたものと思われる。昭和51年町教育委員会によって発掘調査され、戦国時代の柱穴や溝の他に中国製の陶磁器や日本製の陶磁器、刀子・小柄・角釘などの鉄製品が出土している。

3. 立地と現状

本塚群は三島郡出雲崎町大字小木字寺尾166~168番地に所在し、曾地丘陵から派生する尾根上に立地している。この尾根は農橋・常楽寺間の鞍部から西へ伸びた後、北へ向きを変えて先端部でやや北西に屈曲し、島崎川とその支流の小木川の合流点付近まで伸びている。尾根上は幅50~80mの平坦部が続き、東及び西側では急傾斜となって落ちる。先端部は北西方向に緩傾斜で、一部は国鉄越後線開削の際に削り取られている。現状は雜木と杉の林となっているが、地主の話では以前に畠等の開墾は行ったことはないということなので、旧状を割合に良く保っているものと思われる。

塚は尾根先端部から約400mの間に40基が確認されているが、その大半は方形塚で円形塚は7基にすぎない。配列は屈曲部より南ではほぼ直線的で規則性を持っているのに対して、先端部では顕著な規則性はみられず、南側のものとは若干の空白地域をもって構築されていることから、それぞれの構築目的・時期に違いがあるかもしれない。

また、尾根が北西に屈曲するあたりから先端にかけては大小11ヶ所の曲輪状造構がみられ、37~39号塚の東側には、土壘を一辺26mの方形に巡らせた平坦地も存在する。これらは寺尾という字名から考えると寺院跡であった可能性が考えられ、「西越郷土史」では、現在出雲崎町勝見にある曹洞宗法持寺の旧地であろうとしている。なお、この中で塚群については法持寺もしくは小木ノ城との関連が、地元の伝承として残っていることが記されている。



第3図 百塚配置模式図
(出雲崎町役場発行「出雲崎町管内図その4」1:5,000原図)

III 調査

1. グリッドの設定 (第4図)

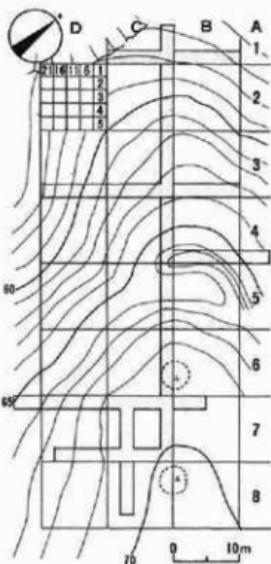
百塚のうち道路法線部にかかるのは1号塚のみであったが、曲輪状遺構が確認されており、この他にも遺構が検出される可能性が考えられたため、グリッドを設定することにした。設定は1号塹を通り、しかも尾根の長軸線に沿うように任意の2点を定めて、この2点を結ぶラインを基線として行った。南北方向にX軸をとり、北から10mおきにA・B……とし、東西方向のY軸も東から同じく10mおきに1・2……と名付けた。各グリッドはそれぞれ2×2mの小グリッドに分け、名称はA-1-3、C-6-15のように呼ぶこととした。

また、全面発掘に先立って幅2mのトレンチを合計7本設定し、他の遺構の存在及び基本層序の確認を行い、遺跡の性格と状況の把握に努めた。

2. 発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長 久間健二）が主体となり、昭和58年9月1日から10月7日まで、実労延23日間に渡って実施した。遺跡の立地が尾根先端部で、発掘器材の搬入路がないため、重機による搬入路作りから始まった。調査は遺跡の性格と全面調査範囲を決定する目的で、尾根上に直交する7本のトレンチを設定し、最終的な発掘面積は1,290m²に達した。

9月1日、午後現地入りし、町教育委員会及び関係諸機関に調査開始の挨拶。その後、重機を使用して搬入路作りを行う。5日は調査員、作業員が現場事務所へ集合し、調査の方法や事務的取扱いの説明を行った後に現場の草刈りを始め、実質的な発掘調査に着手した。トレンチは幅2mで尾根の長軸に76mと16mのものを2本、これに直交するように14~30mのものを5本入れた。この結果、遺構は1号塹・曲輪状遺構Ⅰ・Ⅱとこれに伴うと思われる遺構の他には確認されなかったことから、これらの遺構は人力、周辺の斜面部分は重機による表土剥ぎのうち精査ということに決定した。基本層序（第5図）は、黒褐色腐植土の表土（約10cm）が尾根を一様に覆っており、その下に場所によって厚さは異なるが暗褐色土が堆積する。これは1号



第4図 グリッド・試掘トレンチ設定図

塚・曲輪状造構の周辺ではみられず、これらの造構の構築時に削平されたものと考えられた。なお、曲輪状造構及び塚群の一部は法線外の尾根上平坦部ほぼ全域に確認されているため、法線内の造構も含めて平面測量の必要ありと認め、地主の安達秀寛氏に相談したところ、一部立木伐採などを含め快諾を得たので13日より3日間で実施した。



第5図 基本土層模式図

9月6日、1号塚及び曲輪状造構Ⅱの発掘を開始する。1号塚は現状では円形の盛土をもつ塚と考えられたが、ほぼ方形に周溝が巡っており、構築当初は方形塚であったことが判明した。盛土は大きく2層に分けられ、これらの下(地山直上)には暗褐色土がみられ、表土を削平しないでそのまま盛り始めたと考えられた。また、曲輪状造構Ⅱは西半ではすべてが盛土によって、東半は削平及び盛土によって構築されていることが判明した。このころより天候が安定せず、時々激しい雷雨に見舞われ作業の中止が多くなる。

9月14日、尾根最上部の曲輪状造構Ⅰの表土剥ぎを開始する。造構は全く検出されず、遺物も暗褐色土中より須恵器片3点、土師器片1点、砥石1点が出土したのみであった。

9月27日、重機を使用した斜面部分の表土剥ぎ後、地山面の地形を確認のため人力による精査を実施する。10月3日には実質的な発掘作業を終了し、完掘写真撮影、平面実測図作成。

10月7日、全作業を完了して、関係機関へ挨拶。午後、事務所を撤収する。

なお、発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 久間健二）

管 理 総 括 高橋 安（県教育庁文化行政課長）

管 理 取代 荘平（県教育庁文化行政課長補佐）

調査指導 中島 栄一（県教育庁文化行政課理監文化財係長）

庶 務 飯口 猛（県教育庁文化行政課主任）

高橋 幸治（県教育庁文化行政課主事）

調 査 調査担当 北村 亮（県教育庁文化行政課学芸員）

調 査 員 戸根与八郎（県教育庁文化行政課学芸員）

田辺 早苗（県教育庁文化行政課嘱託）

藤原 敏秀（法政大学大学院生）

協 力 出雲崎町教育委員会

IV 遺構と遺物

今回の調査で発掘した遺構は、法線内にかかる1号塚・曲輪状遺構Ⅰ・Ⅱの一部と、曲輪状遺構Ⅱに付随すると思われる道状遺構である。この他に発掘調査で検出された遺構はない。なお、曲輪状遺構Ⅱは西端部が土壘状を呈しており、曲輪状遺構Ⅰの斜面と合わせて樹形状を呈しているが、ここでは曲輪状遺構Ⅱとして記述することにする。

遺物は須恵器片5点、土師器片1点、砥石2点、寛永通宝1枚が出土している。

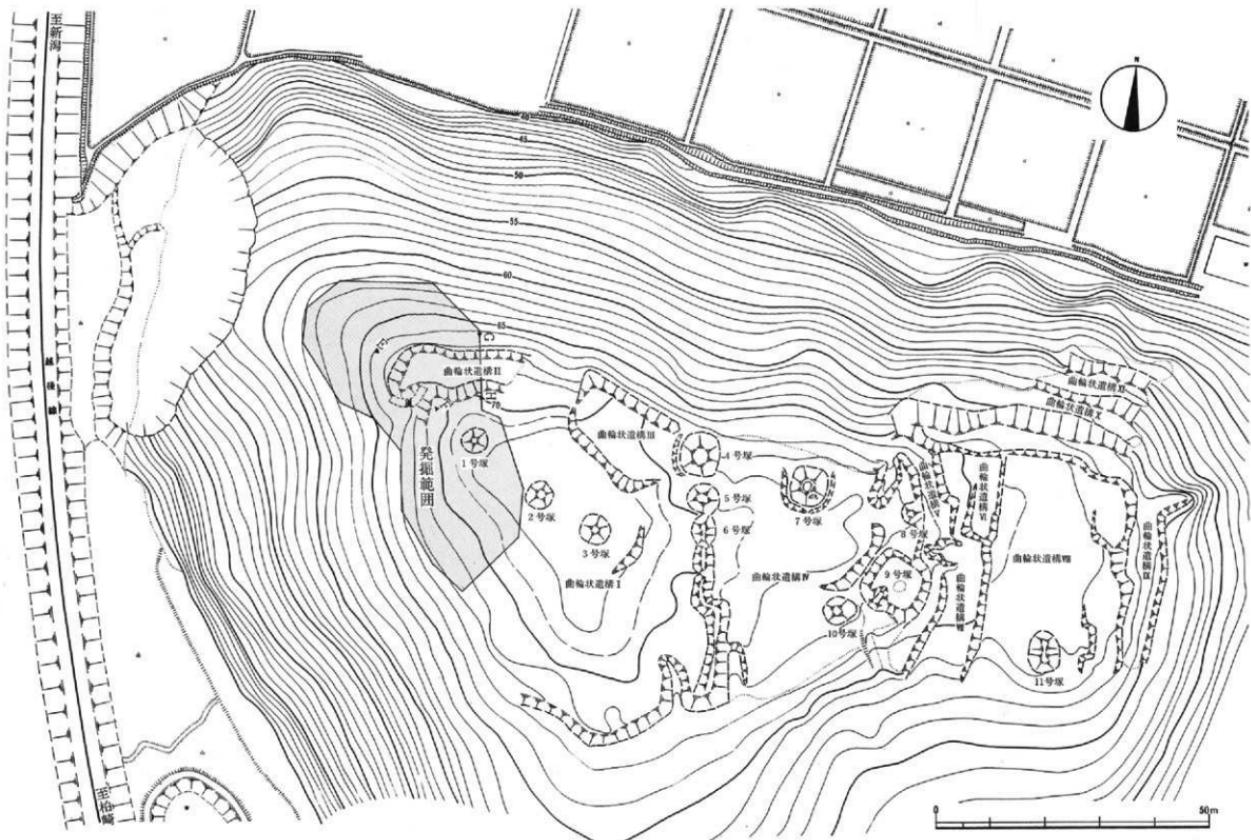
1. 1号塚（第6・7図、図版第2・3図）

本塚は尾根最上部の曲輪状遺構Ⅰの北西端部にあり、百塚の中では最も北に位置している。調査の結果、理納穴等の遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

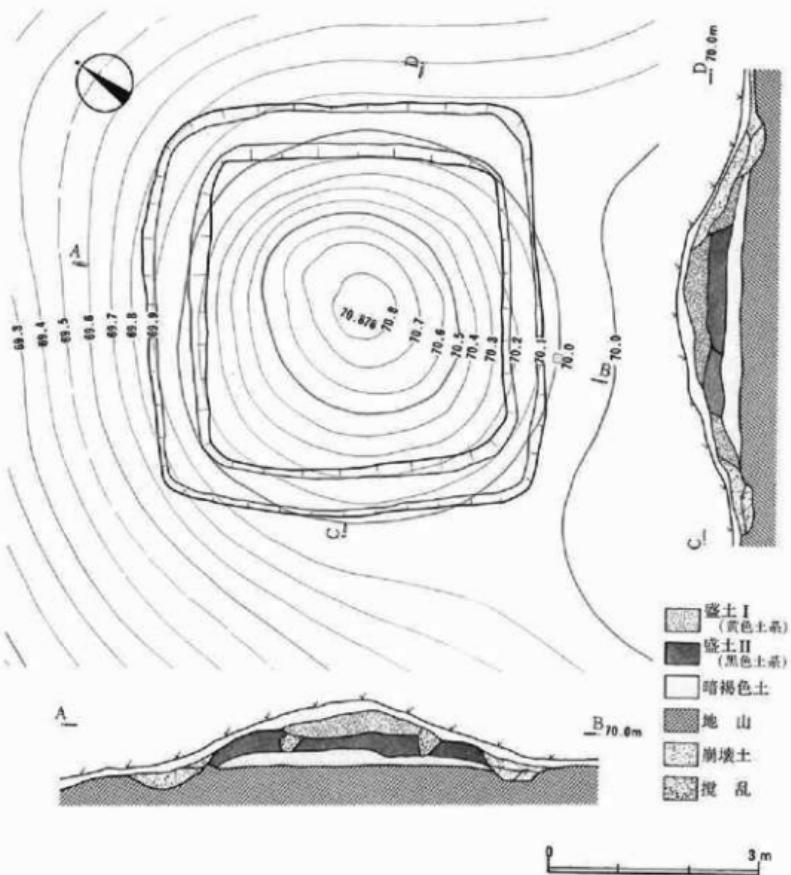
形態 塚の規模は北西—南東軸5.4m、北東—南西軸5.6m、高さ0.88mを測る。調査前の外観調査では、平面形はほぼ円形で、立体的にみても半球状を呈しており、円形塚であるものと思われた。しかし、調査の結果はほぼ方形に巡る周溝を有しており、構築当初は百塚の大半のものと同様に方形を呈していた可能性が考えられた。ただ、盛土断面（後述）をみると限りでは、方形のものが円形になるほどの激しい崩壊土層はみられない。円形塚に方形の周溝を巡らせたとも考えられるが現時点では類例も見当らず、頂部が周溝の中心よりやや南に片寄っているのも不自然である。ここでは、むしろもともと方形塚に方形の周溝を巡らしていたものが、後世に何らかの理由で円形に整形しなおされたと考えた方がよいと思われる。

盛土 盛土は詳細にみればいくつかに分けられるが、基本的には盛土Ⅰ・Ⅱによって構成されている。Ⅰは褐色土でやしまりがなく、地山粒を多く含む。Ⅱは暗褐色土でしまりなく、地山ブロックを少量混入する。いずれも丁寧に突き固めたような状態ではない。また、塚の基盤層である暗褐色土は、尾根上の表土下に一様にみられるものであり、自然堆積の状態で擾乱は全くうけていないが、塚の周辺には存在していない。これらから塚の構築方法を考えると、まず周辺の表土及び暗褐色土を削平して盛り（盛土Ⅱ）、次に地表面を掘込んで周溝を巡らし、その土を上に積込んだものと考えられる（盛土Ⅰ）。

周溝 発掘前の現状からは全く観察できなかったもので、外周は5.3×5.5m、内周は4.2×4.0mである。確認面での幅は0.5~0.8m、溝底部幅0.3~0.4m、深さは確認面から0.2mを測る。断面の形状は台形もしくは大きく開く「V」字形であるが、これは壁の崩壊のために、本来はすべて台形を呈していたものと考えられる。周溝内の覆土は細分はできるが、基本的には盛土部の崩壊土である。



第6図 遺構平面図



第7図 1号塚平面図・土層断面図

2. 曲輪状遺構 I (第6図)

尾根最上部に位置し、曲輪状遺構では最も広い面積を有する。不整五角形を呈し、この中に百塚1～3号塚が存在する。法線にかかるのは西隅の部分で、全体面積の1/7程度である。調査面積が少ないため詳しいことは不明であるが、削平されたような痕跡は認められず、柱穴等の遺構も検出されなかった。遺物はC-8-17, B-7-16, D-8-7よりそれぞれ須恵

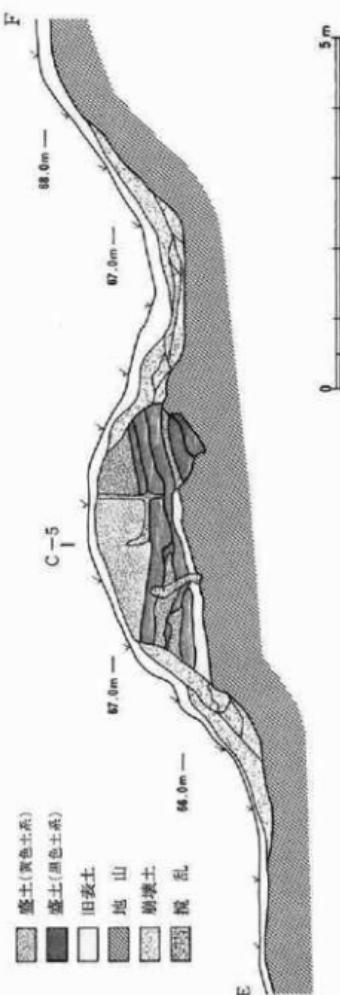
器の壺片が、またC-8-7では土師器杯底部、B-7-21では砥石がそれぞれ表土下の暗褐色土中より出土している。

3. 曲輪状遺構II(第6・8・9図、図版第4~7図)

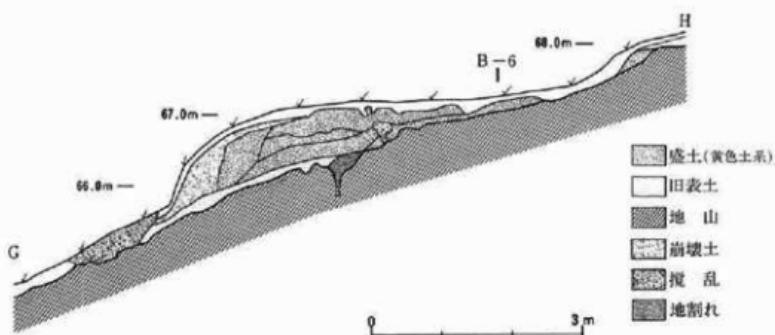
曲輪状遺構Iより北西に約1.5m下った所に位置し、長さ約20m、幅が4.0~5.3mの平坦部である。全体的には南から北へ向ってごく緩く傾斜し、北側は急角度で落ち込み、約1.2mの比高で尾根の自然傾斜面へ続いている。西側の部分は南側へやや張り出しており、尾根先端部からみると土塁のような形状を呈している。この部分と曲輪状遺構Iの北西斜面との間には、平坦部から緩い傾斜で張り出し部をまくようにして北へ延びる道状遺構がある。これは曲輪状遺構IIの裾部に沿って尾根を横切り消滅している。このため、そのまま斜面を下っていたものか、裾部に沿って東へ延びていたのかは不明である。道状遺構と張り出し部の形状を考えた場合、この部分が樹形として機能していたものと思われる。

土層観察はE-F及びG-Hの2ヶ所で行った。張り出し部分を含む西側(E-F)では、尾根の長軸線に沿った比較的ゆるい斜面に土盛りされている。道状遺構の部分を除いて地山直上に暗褐色土が自然堆積のまま残存しており、その上に順次盛土がなされている。上半は地山ブロックを多く含んだ黄色土系の土が、下半には黒色土系の土が盛られている。道状遺構及び西側では地山面が大きく削土されており、道状遺構としての平坦部を作り出しているが、この時の削土をそのまま盛り込んだものであろう。また、西側斜面では崩壊がかなり激しく、構築当初はより急角度な傾斜を有していたものと考えられる。

これに対して東側(G-H)では、西側に比べ



第8図 曲輪状遺構土層断面図(E-F)



第9図 曲輪状遺構II土層断面図(G-H)

てより急な傾斜面に平坦部を造り出している。曲輪状遺構Iの直下から地山部分に及ぶ大きな削土を行ってそれを下部に盛っており、北側半分では暗褐色土が自然堆積のまま残る。盛土は地山ブロックを多量に含んだ黄色土系の土のみで盛られており、黒色土系の盛土はみられない。これは意識的なものではなく、斜面に堆積した表土の薄さに起因するものであろう。

調査の結果、柱穴等の遺構は全く検出されず、遺物はC-4-5の盛土中より須恵器の碎片が1点出土したのみであった。

4. 出土遺物 (第10図、図版第8図)

出土数は少なく、総数8点をかぞえるにすぎない。須恵器片5、土師器片1、砥石2、錢貨(寛永通宝)1で、このうち4を除いていずれも表土もしくは暗褐色土中よりの出土である。

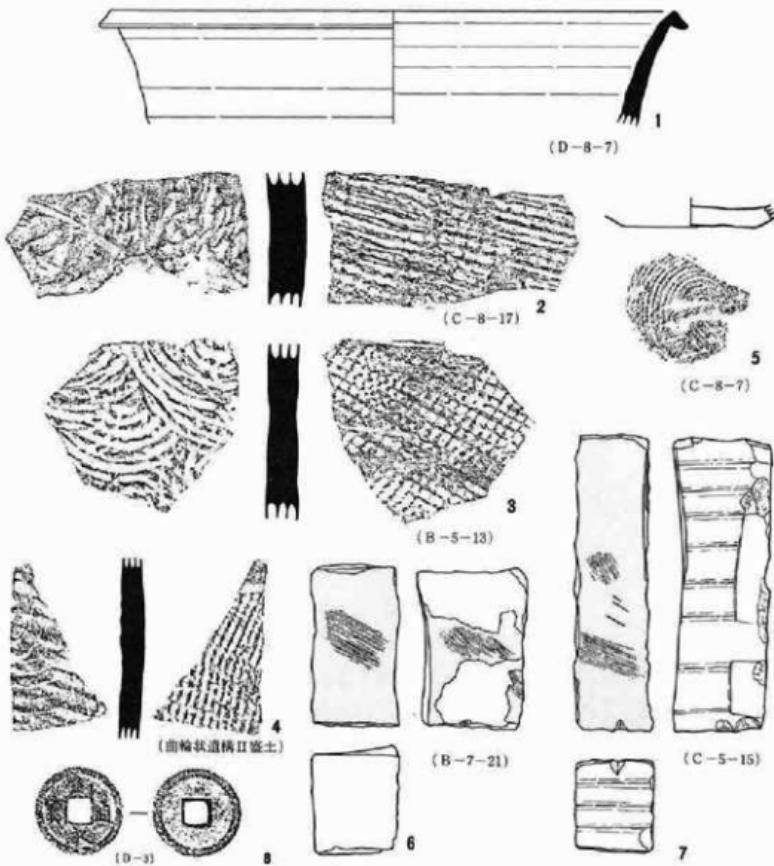
1~4は須恵器の碎片である。1(D-8-7)は口縁部片で、頭部からやや内彎気味に立ち上り端部は外下方へ大きく屈曲してとびだす。整形はロクロナデによって行われ、外面とも黒色の自然釉が一樣にかかる。胎土には $\varnothing 0.1\sim 0.5\text{mm}$ の砂粒を多量に含み、やや粗い。口径30cmを測る。2(C-8-17)は胴部片で、外面は平行叩き、内面は同心円叩きを施した後に粗いナデによってこれが消されている。3(B-5-13)は胴部片で、器壁は薄い。外面は格子叩き、内面は同心円叩きで、外面には黒色の自然釉が一樣にかかる。胎土には $\varnothing 0.1\text{mm}$ 程度の白色砂粒を含み、やや粗い。4(C-4-5)は胴部片で、曲輪状遺構IIの西隅盛土中より出土したものである。外面は格子叩き、内面は同心円叩きの後にナデによって部分的に消されている。

5(C-8-7)は土師器杯底部片である。回転糸切り痕を明瞭に残し、底径4.7cmを測る。内外面とも赤褐色を呈し、胎土は緻密である。 $\varnothing 0.1\sim 0.5\text{mm}$ の砂粒を多く含む。

6・7は凝灰岩製の砥石である。6(B-7-21)は、現存長5.7cm、幅3.0cm、厚さ3.5cmで、

主要磨り面の他に左右両側面にも部分的な磨り面を有する。裏面と上端面には波形の整形痕を残す。7 (C-5-15) は、長さ10.5cm、幅2.6cm、厚さ3.3cmで、磨り面は正面だけである。左右側面には原石を割る際につけたタガネ痕を残し、正面以外の全ての面には6と同様の波形の整形痕を残す。

8 (D-3) は寛永通宝である。径2.3cmで、中央の孔は1辺0.7cmである。



第10図 出土遺物 (1…1/3, 2～7…1/2, 8…2/3)

V 総括

本調査の対象となったのは、百塚1号塚と曲輪状遺構Ⅰ・Ⅱの一部という限られたものであった。1号塚が周溝を伴う塚であることがわかった他は、当初予想された寺院跡等に係るような柱穴等は全く検出されず、遺物も数えるほどしか出土していない。このような状況の中で、考古学的な立場に立って百塚及び曲輪状遺構の性格・時期等を考えるのは難しい。ここでは、現状の観察、文献にみえる記述、地元の伝承等を踏まえて若干の考察を行いまとめたい。

I. 百塚と曲輪状遺構について

本塚群は総数40基を数え、塚の集中度が高いことで知られる当地域（西山町～寺泊町）の中にあって最も多の多い塚群である。地元の人々の間では「百塚」と呼称されており、その性格については後に述べる法持寺に因縁ある墓だとも、小木ノ城落城の際に宝物を埋めたので、発掘^{〔註1〕}を恐れて類似の塚を無数に築いたものとも伝えられているが、いずれも確証はない。

まず、これら40基の塚を現状の形態で分類すると、①円形プランで断面が半円形のもの（2・3・14・37・38号塚）、②方形プランで断面が半円形のもの（4・8・11・13・15・36・39・40号塚）、③方形プランで断面が台形のもの（9号塚）に分けられる。大きさは①で直径2.0～6.0m、高さ1.0～1.3m。②は一边3.0～10.0m、高さ1.0～2.5mといずれも規格的な統一性というようなものは見られない。また、③（第6図）は一辺13m、高さ2.5mと本塚群の中で最大規模を有し、墳頂に広い平坦面をもっている。形態的には金子拓男氏のいわれる地大塚（金子 1974①）に類似するものであるが、未調査のため盛土の状態等は判明しておらず詳細は不明である。この9号塚は西側に幅5m、長さ約15mの溝をもっているが、本塚頂部のレベルは曲輪状遺構Ⅳとはほぼ同じで、溝及び北・東・南側を削平して本塚が造り出されたものと思われる。この他に溝ないしは周溝をもつ塚は4・7・9・26・29・33・36号塚で、これらはいずれも方形塚である。本調査の対象となった1号塚は、現状では円形塚と考えられていたが、調査の結果では方形に周溝が巡ることが確認され、本来は方形塚であった可能性が強いことを考え合せれば、基本的には方形塚のみに周溝が巡っているものと考えて差支えないものと思われる。

塚群の配置（第3図）を考えると、1～10号塚と11～40号塚の間には距離的に若干の隔たりがあり、この部分は曲輪状遺構のある尾根先端部を区切るようにやや低い鞍部になっている。また、11～40号塚は部分的には重なりをもつものの、基本的には直線を意識した配列をもっているのに対し、1～10号は部分的に直線的な配列のようにみえるが、全体では規則性はみられ

註1 7・9・27号塚に盗掘坑と思われる凹地があるが、遺物が出土したという話を地元で聞くことはなかった。

註2 4～6号塚は曲輪状遺構に伴なう土壁を切って構築されており、このため結果として直線的な配列になったものと思われる。

ない。しかし、このことが構築時期もしくは性格の差に起因するのかどうかは現時点では不明である。

新潟県内で「百塚」という名称がつけられている塚群の代表的なものとしては、三仏生百塚（小千谷市）、朝日百塚（越路町）、川治百塚（十日町市）などが上げられる。このうち朝日百塚（中村 1970）と川治百塚（金子 1974①）は発掘調査が実施されているが、いづれも大半の塚が調査時までにすでに消滅しており、配置などは全く不明であったという。このため、個々の塚に對してはかなり詳細な検討を加えているが、塚群全体としての性格を考えるまでは至っていない。ただ、埼玉県東松山市に所在する総数118基の物見山塚群（水村 1980）では、庚申塚・二十三夜塚などの民間信仰に係る塚は、群をなしていない場合が多いという事実を上げ、民間信仰が盛んになる時期が、武蔵風土記稿等の成立した前後でありながら、これらに關することが何も語られていないことから、民間信仰に係る可能性は薄いとしている。この考え方は、地域的な違いなどから本塚群にそのままあてはめられるものではないが、参考とすべきものであろう。

次に曲輪状遺構（第6図）について考えてみよう。基本的には尾根上平坦部に大型のⅠ・Ⅳ・Ⅴを配し、ⅠからⅤに向って順次高度を下げている。Ⅰの北傾斜面にはⅡ・Ⅲを配し、Ⅱは梯形を形づくっている。ⅠとⅣの間には幅3m、高さ1mの土壁を築く。また、ⅣとⅤの間には細長いV・Ⅶ・Ⅷがあり、それぞれ比高1mでⅤに至る。Ⅴの北及び東側は急傾斜となつていて、この部分に帶状のⅨ・X・XIがある。それぞれの間の比高は1m、4m、1mである。なお、Ⅺの屈曲部には東の沖積地へ下る道があり、これは現在でも使用されている。これらの遺構について、『新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード』では城館跡もしくは寺院跡の可能性を指摘している。しかし、城館跡とみた場合、最も重要な南側へ延びる尾根とを断ち切るような空堀等の施設がなく、防禦面での不備が目につく。また、伝承等も全く存在せず、城館跡とは考えにくい。むしろ、伝承等も残っている寺院跡と考えたい。『大日本地名辞書』によれば、「法持寺初め小木村に在り、雲室蒼龍和尚の開基なりしが、近世円通寺跡に移る。……」とあり、『西越郷土史』でもこの地を法持寺跡であろうとしている。法持寺は現在出雲崎町勝見にあるが、寺の古文書によれば「(前略)……大永元辛巳年於二当国小木・建・立一宇・号・法寺寺・而為・長尾為景祈願所。……」とあり、大永元（1521）年に創建されたことがわかる。その後、天正元（1578）年の御館の乱で景虎方についた小木ノ城主雲上寺忠経の菩提寺となっていたらしく、天正八（1580）年小木落城後は、上杉景勝より小木ノ城を与えられた松本左馬介忠範の庇護を受けていたようである。（佐藤 1972）。松本氏は慶長六（1602）年の上杉氏会津移封に従

註3 密教の「六太体大説」の実践として、塚の形態を考えている。

註4 原本は勝見の法持寺に保存されていたらしいが、現在は所在が不明で、写しを石地の押味子之吉氏が所有しているという。

い、この時点では小木ノ城も廃城となっている。法持寺もこれに相前後して勝見へ移ったものであろうか。

このことを踏まえて百塚の構築年代を考えてみると、先述した4～6号塚が土壙を切って構築されていることや、9号塚が曲輪状造構Ⅳを削り出していることなどから、1～10号塚に関しては曲輪状造構がその機能を停止した後に構築されたもので、その上限は慶長六年以降と考えられよう。ただし、11～40号塚に関しては、曲輪状造構と重複しておらず、この推測をそのままあてはめるわけにはいかない。

2. 周辺の塚について

百塚の所在する西山町から寺泊町にかけては、新潟県内においては柏崎市周辺、弥彦村周辺、長岡市の周辺部、六日町から湯沢町にかけての地域とともに塚の集中度が極めて高いところであり（戸根 1979），他の地域とは様相を異にしている。第11図は島崎川及び別山川の中・上流域の塚の分布状況であるが、性格・時代・基数に関係なくその分布傾向を模式的に示したものである。これでわかるように、その多くは曾地・西山の両丘陵から派生する尾根（先端部・頂部・鞍部）上に構築されており、沖積地に立地するものは2～3例を数えるにすぎない。また、集落との関係でその立地を考えると（第2図参照）、集落内に存在するものはほとんどなく、集落裏手の尾根上に多いことがわかる。このことは、新潟県内の他地域の塚をみても同様な様相を呈しており（戸根 1979），集落の位置と塚の立地が密接に結びついていることを示している。ここで中世の文書にみえる当地域の集落を上げてみると、「続会津風土記」（応永二年）获（小木）。「花前文書」（応永十八年）



第11図 周辺の塚分布図

於木（小木）、乙面（乙茂）。『隨心院文書』（応永三十一年）於木（小木）、稻川、吉水、釜屋（釜谷）。『苗小路文書』（永享二年）上条（神条、吉川）、中条（上中条、沢田）、下条（龍谷、藤巻）などで、すでに中世のころよりこの地域の開発が進んでいたことがわかる。これらの集落周辺にはほぼ例外なく塚及び塚群が存在し、それも集落の出入口や旧街道に沿ったものが多い。これは、塚の性格のいかんによらず、構築者が塚自体をその後の生活の中で十分に意識して構築した結果によるものと思われる。

【引用・参考文献】

- 岡本都栄 金子拓男 家田順一郎 高橋陽子 1977 「西古志の考古学的調査」『寺泊・出雲崎』（新潟県文化財調査年報第16） 新潟県教育委員会
- 金子拓男 戸根与八郎 1974① 「川治百塚第6号塚」「北越北線 球藏文化財調査報告書」（球藏文化財緊急調査報告書第2） 新潟県教育委員会
- 金子拓男 池田享 1974② 「寺浦百塚発掘調査報告書」（六日町文化財調査報告書第1冊） 六日町教育委員会
- 佐藤吉太郎 1972 「出雲崎編年史」上巻 財団法人良寛記念館
- 品田高志 1983 「国光の塚群」（柏崎市埋蔵文化財調査報告第3） 柏崎市教育委員会
- 心耕学園郷土教育部 編 1926 「小木の城山」「西越郷土史」 西越郷土史編さん会
- 戸根与八郎 竹田陽子 1979 「孤山塚群」（国道116号線 埋蔵文化財発掘調査報告書） 新潟教育委員会
- 中村孝三郎 神林昭一 1970 「朝日百塚」「越路原総合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡」 越路町教育委員会・長岡市立科学博物館
- 水村孝行 井上尚明 1980 「こども動物自然公園内 埋蔵文化財発掘調査報告 物見山塚群」 埼玉県教育委員会
- 渡辺慶治 1953 「通俗西越歴史物語」 西越村公民館



遺 跡 遠 景 (南西から)



完 掘 後 遠 景 (南西から)



1号塚(東から)



1号塚周溝(東から)



1号塚土層断面 (A-B)



1号塚土層断面 (C-D)



曲輪状遺構II(西から)



曲輪状遺構II基底部(北から)



曲輪状遺構II土層断面（西側斜面）



曲輪状遺構II（樹形部分）



曲輪状遺構II土層断面（E-F）



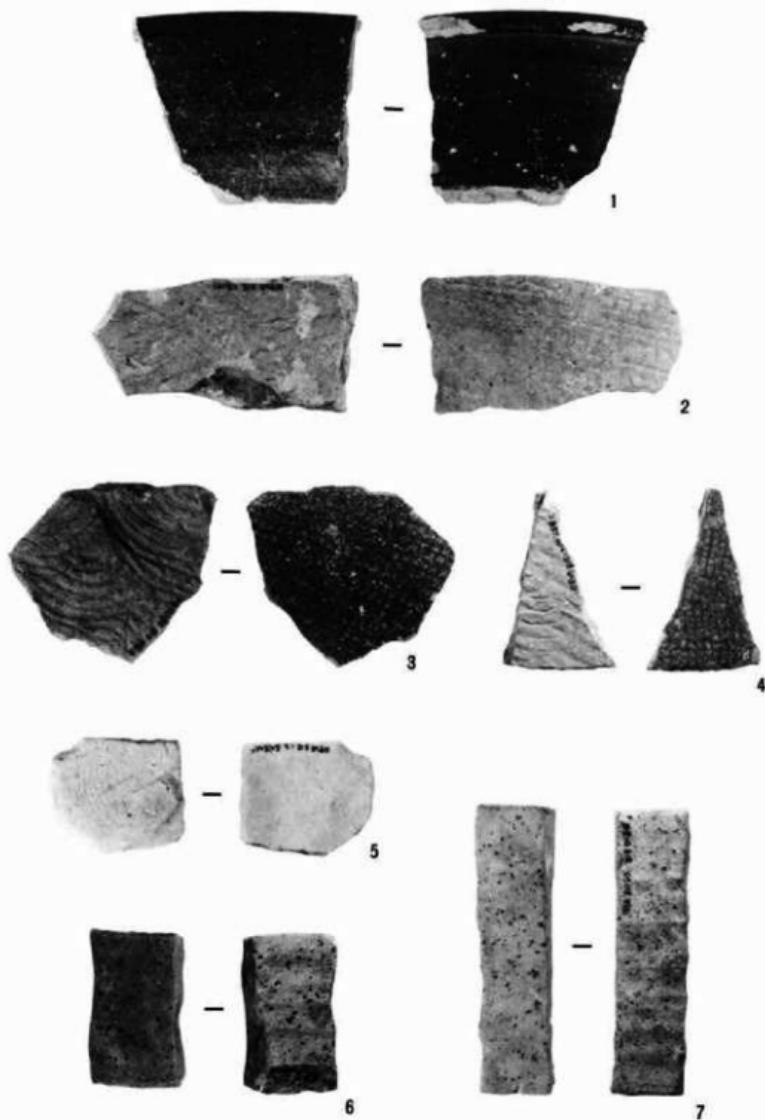
曲輪状遺構II発掘スナップ



曲輪状造構II完掘状況（南西から）



曲輪状造構II土層断面（G-H）



出土遺物(約1/2)

新潟県埋蔵文化財調査報告書第36

国 道 116 号 線

埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲崎百塚

昭和59年5月31日 印 刷

昭和59年6月8日 発 行

発 行 新潟県教育委員会

印 刷 長谷川印刷